

六月で終わつたのです。その祖父も昭和三十二年に、祖母は昭和四十八年にそれぞれ他界し、今思えば随分苦勞をかけ、心配させたと反省しているところです。

その他 姉妹はなし
ということ、頼りになる兄に後事を託して応召できました。

砲兵従軍記

兵庫県 川上亀市

私の軍歴の概要を述べます。

昭和十四年 八月 三日 普通寺山砲連隊入隊

十月 七日 香川県坂出港出発

十月十七日 中支武昌上陸、湖北省東

南地区の警備討伐（部隊名宮本部
隊）

私は昭和十四年八月三日、補充兵として香川県普通寺市、山砲第四十連隊留守部隊へ入隊しました。私の応召当時の家庭の様子は、

（山砲一個連隊、歩兵一個中隊）

祖父 健在 農事に従事

祖母 死去

昭和十五年 一月 一日 第二次陸水作戦参加

父 死去

四月 一日 第三次九宮山作戦参加

母 死去

四月二十九日 宜昌作戦参加

兄 健在 農業・林業に従事

十二月十一日 予南作戦参加

本人 新居浜市で会社員（印刷業）

昭和十六年 二月二十六日 藕塘作戦参加

兄嫁 健在

三月二十七日 西部第三十六部隊へ

弟 死去

転属のため武昌出発

四月十日 善通寺西部第三十六部隊

配屬

四月十六日 召集解除

続いて第二次召集を受け、

昭和二十年 四月 五日 善通寺

翠第一二四八七部隊入隊

四月 八日 和歌山野砲部隊へ転属

四月二十九日 九州福岡箱崎港より乗

船

五月 三日 濟州島上陸、陣地構築

八月十五日 終戦

十一月 一日 佐世保上陸、検疫、復員

私の本籍地は、愛媛県宇摩郡寒川村五三八（現在の愛媛県伊予三島市寒川村五三八）です。

第一回の応召は、愛媛県の故郷からです。昭和十四年八月三日には、国鉄寒川駅前広場に役場、町内会、在郷軍人会、青年団、国防婦人会、親族その他沢山の歓送者が集まって、それぞれの係や団体長よりの激励

と全員の軍歌による見送りを受けて、身の引き締まる覚悟を謝辞としてお答えし、列車に乗り、善通寺へ向かいました。祖父と兄、役場の兵事係、在郷軍人会、国防婦人会、親族など十五人の者が、山砲隊の営門前まで見送りしてくれました。固い握手を交わし、頭の中が真っ白になって、忘我の心境で最後の手をちぎれんばかりに振り、営門を通り、入隊しました。

私服を脱ぎ、褌以外はすべて官物の被服に着替え、補充兵として陸軍山砲兵二等兵に生まれ変わりました。軍隊生活の強い印象は、第一番に馬です。山砲兵として馬という兵器との関係は、想像以上の重要かつ密接なものでした。

毎朝起床ラッパで飛び起きると、厩へ直行。馬糞を糞と共に抱えて外へ出し、糞の乾燥をする。次に馬を安心させ、大人しくしてもらうために、先ず顔、首、背中、腹、尻、四本の足、肛門の周り、の順に糞やブラシで磨くように馬体の手入れ。また、何らかの異常はないかと各部に目を配りつつ、細心の注意をして、丁寧にこすり、さすります。最後に蹄を前脚、後脚へ

と水洗し、蹄の裏の内部をよく掃除して、油を塗り付けて終わりです。

馬は、自分らに代わって重い砲を背中に積んで運んでくれる大事な兵器。馬が故障なく働いてくれると、人間は楽ができる。馬の具合が悪いと、人間にその負担がかかる。馬を大切にして、その手入れを十分にせぬと、山砲隊としての任務が十分果たせない。常に馬、馬、馬である。人間が水を飲み、飯を食い、休養し、煙草を吸うより先に、馬の面倒をみなければいけない。

私は中隊内でも、積極的な面を認められたのか、私に割り当てられた馬は、中隊一の激しい癖のある馬で着たままで肩を二回噛み付かれました。幸いけがはなかったが、油断できぬ馬で気苦労も多かった。馬と兵隊の物語は語り尽くせぬぐらい、人馬一体となつての苦労と哀歎は、昔から語り継がれて、密接で正に血肉の通い合うものであると思います。

まして戦場にあつて、狭い険しい山道を、夜間に一三〇キロの重い砲身を背中に積んで、食べ物も十分に

なく、氷の張る酷寒に、あるいはまた炎熱焼けるがごとき猛暑に、敵襲の危険にさらされつつ、不眠不休のクタクタの強行軍ともなれば、踏み外して手綱持つ兵もろとも、谷底へ転落した悲しい経験も少なくない。これはもう馬と共に戦闘をやつた兵隊でないと分かつてもらえない。それぐらい、兵隊にとって馬は大切に重要な間柄の生きた兵器である。

入隊後、馬に次いで思い出は、軍隊手帳に記されている「軍人勅諭」です。入隊すると一週間以内に暗記せよとのことでした。私は夜の消灯後、便所で軍隊手帳を持って努力したので、三日で成功し、班長さんにはめられました。

次に苦しんだのは、砲身（一二キロ）の搬送でした。内地の営庭（広くて平坦）で一人で担いで二百メートルの距離を歩いて行くことができれば一人前と言われました。私の体格では到底それは不可能でした。二人一組で砲身を担いで行く訓練をよく行いました。

真夜中の就寝中、非常呼集で起こされて、よく二人一組の搬送をやりました。これは野戦へ出征してからも

よくやらされ、討伐期間中もしょっちゅう行いました。野戦では特に山の上まで砲を上げるのに、馬は山の上まで登れないので、途中で馬から人に替わり、分解搬送する。今思うと、よう頑張ったものと我ながら感心しています。若さと気力のためものでしょうか。

入隊して三カ月目、第一回の実弾射撃訓練がありました。私は成績がよかったのか砲手を命ぜられました。砲手は小隊でNo 1の兵が任せられる名誉ある任務です。嬉しくて軍事郵便のハガキで故郷の家族に知らせました。右へなんぼ、左へなんぼ。よい成績で抜擢されました。

軍隊では人の嫌がる制裁（ビンタとり）も初めの一週間ぐらいで、それから後はあまりなかったと思います。私はいつ死んでもよいと覚悟していたためか、深刻に辛いとは思わなかった。

野戦では山へ上がるとき、山腹の途中で砲を馬から下ろして陣地へ搬送し、組立てたが、その間敵の迫撃砲の弾丸が飛んでくるのがよくあった。味方の砲の重さと、敵の迫撃砲の危険と、二重の苦しみでした。

一番恐ろしかったのは、敵の飛行機の攻撃にさらされながら、敵の地上軍の包囲を受けて、山の中で一日も二日もじーっと隠れて耐え忍んでいたことであり、なんともいえぬぐらい不安で恐ろしかった。

各地の作戦や討伐に参加して、昭和十六年三月末ころ、内地へ帰る命令が出た。戦友も戦死、戦傷して、少なからぬ損害を出したが、私は幸いにも元気な体のままで、内地へ帰ることができて嬉しい限りであった。

戦地にいる間に、内地から慰問袋が届き、皆でワイワイ言って喜び、慰問袋を分け合って、期待の心を膨らませつつ開封しました。私の分は、名古屋市在住の女性のもので、私はその人の住所へお礼状を出しておいた。召集解除、満期除隊になってからその女性と文通を交わし、それが発展して目出度く結婚したのが今の妻です。

戦争という悲惨な場面の多い反面、その戦場に届いた慰問袋が取り持つ縁によって結ばれた私ども夫婦は、一昨年、結婚五十年を迎えました。そのとき、神戸新聞社及び兵庫県、相生市から、結婚五十年該当者各位

と一緒に祝っていただきました。昨今も、慰問袋という出雲の神様に感謝し、五十年間共白髪になった感謝の毎日です。現住所の相生市も、その当時は物品の不足などで、心も体もそして生活も辛苦の連続でしたが、それに耐え、生きている喜びに感謝して暮らしてきました。

―第二回目の応召―

前述のとおり、昭和二十年四月五日応召入隊しました。その当時、私は現住地の兵庫県相生市で現・石川島播磨重工の相生工場で働き、既に妻帯し長男が生まれており、職場では職員として勤務中でした。そのため応召期間中は、ずーっと本給が支給されました。有り難いことでした。そのお陰で妻子の生活費も最低限度の保障があり、私としても後顧の憂いなく安心して、応召できました。

四月五日、善通寺の部隊へ入隊しましたが、四月八日、私一人和歌山の部隊へ転属となりました。なぜ私のみがただ一人で他の部隊へ出されてのか不明で、不

安でした。とにかく今度の部隊へ行きますと、服装検査に合格しないから、善通寺の元の部隊でもっと種々の不足品をもらってこいとの理由で、公用の腕章を付けて再び善通寺の隊へ戻りました。

被服係が親切な人で、沢山の品を出してくれ、その中から水筒その他最小限度のものは身に着け、毛布その他の品は梱包して新任の部隊気付で発送してくれました。これでや々と和歌山の部隊に落ち着きました。

新しい野砲部隊では、野砲は以前の山砲に比べると大きいもので、馬で引つ張るものです。射程距離も長く、弾丸も大きく重たいと思えました。毎日毎日射撃訓練のみでありました。

四月二十九日、私の隊は砲二門を持って九州福岡の箱崎港より大連へと出港しました。私の乗った船は最後尾で、先行は四ないし五隻でした。当時空も海も敵アメリカ軍の方が断然優勢でした。先行している友軍の四、五隻の船は敵潜水艦の魚雷攻撃の餌食となり、全部沈められ、私の船だけ幸いにも残りまして助かりました。大連へ行く予定の部隊も大部分が海中に沈ん

だったので、予定を変更して途中の朝鮮の済州島へ上陸することとなり、五月三日上陸です。

済州島での任務は陣地構築です。道具はスコップと十字鍬だけの貧弱なもので、強力な道具は皆無なので、作業も思うようにはかどりません。加えて、時々敵飛行機の飛来があり、その都度持ち場を逃れて安全地帯へ待避する状況でした。山の中腹へ野砲の格納陣地を作る仕事です。緑色の布を覆うて芝生を張り、艤装きざりをしておりました。最も困ったのは島の波打ち際は熔岩で覆われていることです。水は塩分が強くて飲料水には適せず、住民よりらい水をする始末でした。

この戦争末期、朝鮮全体ではどうであったか不明ですが、済州島に関する限り、軍隊と現地住民との交流関係は友好的で良好であったと思います。しかし、中支に従軍していたころに比べると不自由でした。

このころは、内地の国民全体の食生活は極端に不自由な状態でしたから、済州島の不自由さもやむを得なかつたものと考えられます。

済州島で最も困ったのは、伝染病の発生でした。部

隊内に赤痢が発生し、最も多いころは約二十人以上の患者がおり、部隊内で隔離されていきました。私は運よく難を逃れました。医薬事情はもうお粗末を極めたもので、鍋炭を丸めるのみです。現地住民の家を訪れては鍋の底をこすってもらつて鍋炭を大事に部隊へ持ち帰り、衛生兵に渡し、部隊内で計画的に下痢薬として服用されました。現在、平成時代の常識では信じられないことでした。

八月十五日以後より内地へ帰還するまでの間の島での食料は一日二回の食事でした。理由はいつ帰国できるか分からないので、節約しろとの命令です。それでも何とかして少しでも補うことを考えて、日本の軍票で島民より薩摩芋を買い、一食分はその薩摩芋で補いました。芋もツルも葉もすべて味噌汁にして食べました。現在の豊かで贅沢な時代には、到底考えられない貧困な事情のもとのぎました。戦争とは、典範令にも示されているごとく「困苦欠乏に堪えて、隠忍自重必勝の信念をもつて、最後まで勇戦奮闘すべし」とあります。